一般研究 研究報告書

二年度研究報告

研究課題

木津宗詮家の総合的研究 -19・20世紀の茶の湯世界-

東京農業大学地域環境科学部造園科学科 助教

粟野 隆 研究代表

はじめに

あり、ここでは改めて繰り返さないこととする(注1)。 茶家である。研究着手の経緯と目的は、昨年度の成果報告書の 近世後期に始まり、当代で六代を数える木津宗詮家(以下、 木津家と省略)は、 で触れた通りで 大阪を代表する

点から述べることとする。 渉状況と成果について、文献史学、 状況と成果について、文献史学、美術史学、建築史学、庭園史学という多面的観点それぞれの観以下、本報告書では当代・木津宗詮宗匠の全面的協力のもと、昨年度から継続した調査研究の進

木津家と文書類について

(一) 初代・木津宗詮と二代・木津宗詮―三代・宗詮に至るまで―

茶器を所持した大茶人として知られている。 とになる。露香は昨年度の報告書でも述べた通り、明治時代の関西財界の重鎮であり、 草屋の七代目・平瀬露香(天保十年~明治四十一年・一八三九年~一九〇八年)が弟子入りするこ では茶人として広く認識されていた (注5)。そしてこの二代・宗詮に、大坂の屈指豪商である千 (一八三七) 以降、嘉永元年(一八四八) まで武者小路流の「茶人」として名前を確認でき、大坂 紀州徳川家に出仕をし、茶道役ではなかったことは確かだろう。大坂の人名録に依れば、天保八年 家の藩政史料から初代・宗詮の出仕形態を示す明確な典拠を明示し得ないが、初代・二代と続けて、 浅斎、文政五年~明治二十九年・一八二二年~一八九六年)を示している。現時点では、紀州徳川 期からみて、この御仕入方を勤めていたのは播磨国高砂の善立寺の出で養子に入った二代・宗詮(得 慶応三年(一八六七)に記述が見えるが(注4)、役職名が異なり、文久二年と慶応三年という時 たい。また、 ある。二説の内、茶道役とする説は紀州徳川家の御数寄屋方は表千家が代々勤めているため考えが 巻の記述(注3)に基づくと推測される「茶道役(茶頭役)」とする説と「小納戸役」とする説が 川家に仕えたとされる。紀州徳川家での役職は辞典類によって説が異なり、概ね『松平不昧伝』中 と親しく交流し、不昧の示唆で武者小路千家流に入り、天保二年(一八三一)に大坂在住で紀州徳 した。 雅楽の嗜みが深く、 仁法親王から自作の横笛に銘(「柴舟」)を賜り、四天王寺の楽人と共に管弦を奏するなど、 という法名で三十六代住持を勤めていた。寺伝によると(注2)、願泉寺に来駕した聖護院門跡盈 政二年・一七七五年~一八五五年)は、木津(現・大阪市浪速区大黒町)の願泉寺に生まれ、 その江戸で出雲国松江藩藩主・松平不味(寛延四年~文政元年・一七五一年~一八一八年) 木津家の成り立ちについての情報を補足したい。初代・木津宗詮(松斎、安永四年~安 紀州徳川家の分限帳では大坂住まいの「御仕入方」として、文久三年(一八六三)と やがて住持職を弟(三十七代・昇龍)に譲り、雅楽を広めるために江戸に下向

(二) 文献整理進捗状況

料や家政文書の一部も含まれることから、平瀬家文書は木津家文書と区別が付きやすくするように 一七○○点前後と大枠を提示するのみに止めさせて頂きたい。 面を調整する関係から、文書総数の変更が予想されるため、本報告書での総数は昨年度同様、 本来なら今年度の段階で文書の総数を確定させるべきであるが、文書目録中に混入している建築図 文書が全て移管された際、求めに応じて副次的成果を提供できるようにきるように進めていきたい。 いる。本研究助成終了後も研究公表に資する内容に高めていくと共に、大阪歴史博物館に寄託予定 心掛けた。この作業は若干の遅れはあるものの、本報告書作成段階で二回目の通覧に着手し始めて 情報の整理を図った。 は、目録の精度を高めて内容の正確化を図ると共に、茶書や和歌書など大枠の分類項目を設けての ただ、簡易目録は昨年度の報告書に記した通り、作成内容に不備があった。そこで本年度の調査で 木津家に伝来した文書群は、簡易目録作成により総数が約一七〇〇点前後に登ることが判明した。 その際、文書群には平瀬露香・露秀親子を輩出した千草屋平瀬家の茶の湯史

要な箇所の作成に止まらず、全頁の写真撮影を追加で行なった。こちらも遺漏はあるものの、 加えて今年度は、茶会記をはじめ今後の研究に必要と思われる文書に対して、目録情報作成に必 処が立ったといえる。その成果として、今年度は後述する平瀬家の茶会記五点の翻刻に着手した。

(三) 文献史的成果

を中心に、初代・宗詮から四代・宗詮(花笑斎、明治二十五年~昭和五十二年・一八九三年~ 多数の著作と草稿、編集発行の任にあたった刊行物の存在がある程度以上の比重を占めている。 三十点以上の茶会記と、数点の煎茶会記が挙げられる。茶会記以外では茶書、三代・宗詮が残した 分析を進めていく中で、数が増えることが予想される。他には歴代の木津宗詮が収集したであろう 明治四十四年(一九一一)四月上旬までの数会の茶会記を確認できている。茶会記の数自体は今後 會会記等一紙文書貼付帳〕」と仮タイトルを付与したものから明治三十八年(一九〇五)一月から 会記、自会記は展覧目録や茶会記などを張り付けた形態の「[什器展覧目録并ニ明治四十三年大師 一九七七年)までの文書で大部分が構成されている。茶の湯に関する史料は、三代・宗詮の茶会記 木津家自体の文書は三代・宗詮 明治四十年」という表題を持つ明治四十年(一九〇七)一月七日から十一月までの他 (聿斎、文久二年~昭和十四年・一八六二~一九三九

ものがある。 集もあり興味深いものがあるといえる。そして、三代・宗詮もしくは四代・宗詮が調査・作成した 前述の初代・宗詮と二代・宗詮の紀州徳川家への出仕形態などを把握する上で、成果を期待させる であろう、 茶書以外の内容は和歌書、 初代・宗詮の履歴書上や二代・宗詮の出自であろう住山家に関する記録も確認された。 園芸書をはじめ多岐に渡っており、中でも和歌書は初代・宗詮の和歌

道具の売り立てについても、「平瀬家藏器入札高直附」という入札の結果を書き残した史料がある 間で十点以上の存在を確認できている。他にも平瀬家の所蔵道具の売り立てに伴う目録や、「平瀬定できる史料により、文政十三年(一八三〇)一月から明治四十一年(一九〇八)十一月までの期 相当な分量の平瀬家文書も含まれることが判明した。平瀬家の茶会記と思われるものは、年代を特 ことから、その顛末もある程度分析可能であろうと思われる。他に茶の湯以外では、 隠居」が作成した天保十四年(一八四三)の年記を持つ「道具控」が含まれていた。こうした所蔵 付けなど、家の経営に関わる史料も若干混入していることが確認された。 さらに木津家文書には、昨年度の報告書でも述べた平瀬露香・露秀親子の茶会記だけに止まらず、 銀相場の書き

(四) 平瀬家茶会記『茶燕録』について

の翻刻を行なっている。それぞれの表紙の記載は次の通りである(表1参照)。平瀬家の文書類で重要となるのが、『茶燕録』と題された茶会記である。現時点でその 内の五

- a 「文政十三庚寅年 茶燕録 玄々菴」
- b 「木犀居 茶燕録」
- c「茶燕録」と記した題箋貼付。
- d 「茶燕録 獨樂菴」
- x 「卯冬 茶燕録 木犀居」

えるが、これは初代・宗詮である。なお、初代・宗詮が松平不昧の勧めで故郷の大坂に戻ったのはの河合道臣を招いた茶事に同席している記録も注目される。亭主および連客に「木津」の名前が見 死去する天保六年まで、計二十六回を記録している。登場している広岡久右衛門(加島屋)と大寺〜天保六年・一八〇六〜一八三五)の別号と推測される。文政十三年(一八三〇)から、平瀬水がaの「玄々菴」については不詳であるが、文政期の平瀬宗十郎家当主である水(士瀾、文化三年 文化年間のこととされている。 四郎五郎は、共に大坂を代表する両替商であり、 いたことで知られる。この他、松平不昧出入りの道具商である伊藤勝兵衛(道勝)が、 特に大寺家は楽家三代道入の「稲妻」を所持して 姫路藩家老

当主である春温(士陽、文化十五年~慶応二年・一八一八~一八六六)の茶会記と推測される。三bは天保十一年(一八四〇)から同十五年にいたる計十二回を記録しており、この時期の平瀬家 おり、大坂の茶の湯の多様性が窺える内容となっている。この茶会記には木津の名前は見えないが、 下で伊藤若冲のパトロンとして知られる菜種問屋「人参三蔵園」の吉野五運(微斎)等が登場して 井宗六が吸江斎、永楽保全、二代・住山楊甫を招いた席の他、遠州流八世の小堀宗中や、吸江斎門 天保十年に初代・宗詮の取次で武者小路千家の許状を得ており、 師弟関係にあった。

段の料理の記録が続くのが、このcの特徴である。注目できるものには、明治三年に催された平瀬 土田友湖の実弟であり、この時期には両替商の大寺四郎五郎家に寄宿していたとされる。 妹を妻としており、千草屋の親族として露香を支えた人物である。また、土田湖流は袋物師である 仙五十 表千家の碌々斎が招かれている。 回忌の茶事、同五年の平瀬士陽七回忌の茶事があり、後者では武者小路千家の一指斎と共 いだばかりのこの時期に、精力的に茶会を行っていることが判る。「後酒」として、 一八三九~一九〇八)の茶会記と判明する。 (七〇) から同九年にいたる二十四回を収め、巻末の署名から平瀬露香 客として名前が頻出している甲谷権兵衛 その多くは露香の自会記であり、 (露吸)は露香の義 (天保

青木宗鳳や、磯矢宗庸といった大阪を代表する茶人の茶会が中心となる。cの自会記に対し、こち らは露香の他会記にあたるものと思われる。 dは明治五年の六回を記録している。「獨樂菴」は松平不昧が江戸の大崎園で掛けていた篇額で これを入手した露香は一方庵にこの額を掛け、 別号として用いていた。その内容は、

ている。 さが見られる(士瀾、士陽は共に自らを「拙」と表記する)。 名による平瀬家本邸の書院「木犀居」を名乗り、自らを「亀之介」と書いている点でも、 商である天王寺屋五兵衛の番頭であり、文久三年(一八六三)に独立して茶舗「先春園」を創業しxについては、「卯冬」が何年を指すのが問題となる。連客に名前のある荒掘源之助は名門両替 のため明治元年とした場合は、平瀬家を継いだばかりの露香による他会記となる。 である。特に重要なのは、平瀬家六代目の春温が慶応二年(一八六六)に没している点である。こ このため候補となるのはこの前後の卯年、即ち安政二年(一八五五)か明治元年(一八六七) 四代・春郷の命 ぎこちな

の箱書による「藤四郎いもの子」、 予守の好み表具による「春屋宗園一行」を舟越の書状と添えて用いたり、「不昧公箱」と松平不昧 される七代・直斎堅叟を始めとする歴代の自作道具や好み道具が多くを占めているが、道具を提供 を選んでいるからである。 節拝領、此度、大鷹釜散紙用ユ」と、一指斎が八才で高松松平家の下へ伺候した際に拝領したもの 家の人物で占められ、続く道具の記載の前に「道具、悉皆予所持分也」と懐石も含めた茶会の道具 陰暦から太陽暦への改暦以前であるため、少し時期が遅い気もする上に、 時に同じく吸江斎の弟である武者小路千家十代・以心斎(天保元年~明治二十四年・一八三〇年~一指斎は表千家十代・吸江斎祥翁(文政元年~万延元年・一八一八~一八六〇)の次男で、五才の おきたい。 した平瀬露香の趣向も少なからず反映されたようである。掛物に江戸時代前期の旗本茶人・舟越 うである。というのも宮崎寒雉の乙御前釜を用いているが、「一指斎八才之時分、高松侯へ上参之 を全て自らが用意したことを述べている。初めての茶の湯という意識は道具組みに影響を与えたよ 茶湯」とあり、一指斎の初めての茶の湯であったことを明記している。 露目茶会の可能性も拭えないが、ここでは口切の茶の湯としておきたい。記載は次いで「一指斎初 一八九一)の養子となっている。この十一月十一日の茶会は「初会」とあり、同年十二月三日の太 十一代・一指斎一叟(嘉永元年~明治三十一年・一八四八~一八九八)を亭主とする茶会である。 最後に、 覆は永井間道である。 それは『茶燕録』dの明治五年(一八七二)十一月十一日に行なわれた武者小路千家 翻刻できている平瀬家の茶会記でも、特別なものとなるであろう茶会を簡単に紹介し その他の道具は武者小路千家四代・一翁宗守や武者小路千家中興の祖と 瀬戸茶入を選んだことなどはその表れであろう。 客は二代・宗詮以外は平瀬 新造や改築の茶席の御披

家に関係して興味深いのは閏三月廿三日正午の那六右衛門を亭主とする茶会が挙げられる。 会分析は更に検討材料を用意した上での後考の課題としたい。他に現在、翻刻できている中で木津恐らく二代であろう木津宗詮を亭主とする茶会を現況では三会確認できているが、木津宗詮の茶 恐らく二代であろう木津宗詮を亭主とする茶会を現況では三会確認できているが、 いる。特別な機会であったと考えるべきなのかも 「先者ノ十三回忌茶事、追福也」と追善茶会であったが、席は しれない 同様の事例を見出 「於木津亭」と木津宗詮が 世ない この茶

このように 省みられる機会は少なかった大坂の豪商の茶の湯を考える上で、 『茶燕録』は、平瀬家代々の茶会記となっている。これまで大阪=煎茶というイメー 重要な史料と言える。

(一) 図面整理進捗状況

も含めたため、重複する図面など今後更なる整理が必要である。 ら新出図面の簡易リスト作成作業は終了したが、リスト項目の充実化だけでなく、 は八九三点明らかだったが(注6)、 として、多くの作品を手がけた三代・宗詮のものであった。本研究開始以前における図面関連史料 木津家には茶室、邸宅、庭園および道具に関する図面が遺されており、その大部分は「茶室建築家」 新出図面を八一一点確認し、合計一七〇四点となった。これ 青焼き図面など

関連図面などが挙げられる。 王寺本坊庭園及び払塵亭・岩田邸関連図面、 地域史や茶道史にとって重要な平瀬家関連図面、物件のみが知られて直接的史料の少なかった四天 新出図面の中から、 目下特に重要と思われるものに、 物件が良好に維持されて図面も充実している谷口房蔵 木津家と関わりが深く、 大阪を中心とした

絵図やよく知られる「瀧本坊敷寄屋圖」など、近世以前の茶室研究にとっても研究価値の高い また、三代・宗詮による設計図面ではなく、 古典茶室に関する史料も散見された。多数の起こし \$ 0

【建築図面分析】

別邸茶室) 今回は、 及び四天王寺「払塵亭」について、その照合作業を行った。 図面と実物が両方現存する物件である、田尻歴史館茶室「芳庵」 (谷口 ||房蔵 吉 見

れた。 同様の色分け図面を考える場合、この図面が一つの参考例となる。 この便所を描いた図面は、便所部分を通常の黒の墨で、その他を朱墨で描いていることから、 出来るだけ変更を加えず、 設計変更図面であることが明らかとなった。 かない大正期と考えられ、 目二畳)、水屋(約三畳大)、 「芳庵」は田尻歴史館敷地内に良好に維持されているが、茶室 プランの大きな違いは便所の有無であるが、現地調査で図面通りの便所が確認でき、 現存図面は平面図二枚、 敷地境界ギリギリに便所を入れ込むための工夫と考えられる。そして、 鞘ノ間、 便所からなる。建設時期は恐らく洋館建設とそれほど間を置 扣ノ間の押し入れは隅が凹んでいるが、当初プランに 屋根伏図一枚で、二枚の平面図には相違が見ら (七畳)、扣ノ間 (六畳)、寄付 一枚は

るらし 連子窓の敷鴨居は比較的新しく見えた。 しては、図面通りの場所に痕跡が見られ、三代・宗詮による設計変更か、その後の改造か不明である。 の材料が変更され、高さも若干下げられていたことくらいで、ほぼ図面通りであった。連子窓に関 たので、立面の寸法確認を詳細に行った。 和八年の改修期のものと断定出来る。 畳五畳を単純な長方形に収めた建物である。 の連子窓が、柱間いっぱいに広げられ、内法高寸法が約二寸大きくなっていたこと、中柱袖壁止め 四天王寺「払塵亭」も物件が良好に維持されており、 11 図面には昭和五年以後に使用される「泉」の花押や「修繕」という記入が確認され、 今回新出の「払塵亭」図面は合計七枚で立面図が充実していい用される「泉」の花押や「修繕」という記入が確認され、昭 寸法的に大きく異なっていたのは、三畳台目茶室躙口上 四天王寺によると、大正七年建設、昭和八年改修であ 三畳台目と四畳半の二つの茶室、

【庭園図面分析】

認できた十庭園の分析から、四点の特色を導いた。すなわち、一、庭園設計の基礎として方眼を図木津家所蔵の図面類の整理から抽出できた十八事例の庭園設計図のうち、地割構成の全体像が確 技師長をつとめ、 的な感性で庭園設計をおこなっていたという推論を得ている。 園構成上重要な地物を配置すること、である。以上から、三代・宗詮は、 から、縦横の基準線を図郭ほぼ中心に設け、その中心から上下左右に線をオフセットしたとみられ 計の構成単位とすること、三、方眼の各交点は庭園のほぼ中央部の建物隅の柱とほぼ合致すること する)、二、方眼の大きさは、共通して六尺(約一・八メートル)であり、建築の柱間寸法を庭園設 面に割付けたうえで、庭園の地割構成を描くこと(この方法は、 方眼の線上には、飛石園路の踏分石、大振りの景石、灯籠などの石造物のように、 明治後期から大正期にかけて活躍した造園家、 画家にして、日本庭園株式会社の、庭園設計の基礎として方眼を図 本多錦吉郎の庭園設計方法と共通 きわめて幾何学的

記の基礎的知見をふまえ、 庭園の主たる構成となることが多い 「流れ」 に着目して図面分析を

ようとした設計意図が確認された。これらの特色は、弘世氏庭園、四天王寺本坊庭園に顕著に表れる。 きに、線形を屈曲させる、瀬落ちを設ける、橋を架ける、沢飛びを打つなど、景観上の変化をつけ をうかがうことができた。 は下流では橋を架けるというように、 せることがわかった。次に、 類があるが、 寺田氏庭園など、 上流で橋を架けた場合は下流に沢飛びを打つ、あるいは上流で沢飛びを打った場合 緩やかに蛇行を重ねながらも、 八庭園が確認できた。これらについて、流れの建物に対する位置と線形 あわせて、断定はできないが、 流れと交差する動線には、橋を架ける場合と沢飛びを打つ場合との二 の庭園作品 ほぼすべての事例が橋と沢飛びとを交互に設けるという特色 のうち、 流れを主要な構成とした設 おおむね、 流れの湧水地点から、 主要建物に対して ほぼ五メートルお 四十五度の斜行さ 四天王寺本

(二) 遺構調査報告

願泉寺、田尻歴史館、 園、他は全て三代・宗詮の関係であり、 以外の全てを実見することが出来た。奈良は初代・宗詮が関わったとされている柳生藩家老屋敷庭 「青濤亭」・「豊泉亭」、片山邸「豊泉亭」の六物件が知られていたが、現存しないらしい 川があったが、今年度は香川の調査を実施し、その他奈良・京都・大阪の七物件の調査を行った。 測調査を行なってきた(注7)。三代・宗詮と関わりの深い地として、関西以外では特に岡山と香 一九七四)によって、 これまでの研究で三代・宗詮による建築作品の全体像の把握を試み、 川は『讃岐の茶室』(毎日新聞社高松支局、一九六八)及び『新讃岐の茶室』(毎日新聞社高松支局、 五風荘である。 「枕流庵」、東光寺「松月庵」、高木邸「即休庵」、 京都は八幡市の泰勝寺「閑雲軒」、 鳥飼邸「独楽亭」、大眉邸 いくつかの物件について実 大阪は吉年邸、 四天王寺、 「枕流庵」

建築物件

様な飛石や敷石で賑やかに接続するといったものである。主体部の屋根から一段下げた付庇で広い軒下空間をつくり、 なものとするが、茶室内部空間は複雑な構成であることを指摘したが、今年度調査物件の多くから 今回の調査建築個々の特徴は表2の通りである。共通する特徴として、 それと同様の特徴とともに、 複雑な構成は軒下空間にも当てはまることが判明した。 袖壁で分節し、外腰掛を取り込み、多 昨年度、 骨格をシンプ それは、

るが、斜めのラインや袖壁、 形の外郭ラインを守って内側を室内、外側を室外とする。これには、平面計画上大きな制約が生じ 品のいくつかでは主体部の単純な一つの屋根で、複数の室を収める。 通常数奇屋建築は部屋ごと、水屋や廊下など、 通常の茶人とは異なり、 平面図と長く向き合う設計者であるからこその特徴と言えるかも知れ踏み石などを工夫することによって複雑かつ独特な空間を実現してい 棟を分けて屋根を折り重ねるが、三代・宗詮 そして、主体部の単純な長方 の作

庭園物件

の状況から顕著であり、小川治兵衛や岩本勝五郎らの手法とも酷似する。ただし、三代宗詮の手が せず伏石を多用する点が把握できた。これは、現存しない谷口房蔵住吉本邸庭園においても古写真 た近代造園家の手法とも酷似する点が判明した。しかし、三代・宗詮の流れは、景石に立石を利用 を効果的に用いること、という三点の特色を導き、 こと、二、緩曲線の回遊園路を多用すること、三、蛇行する流れ(枯流れ、池を取設する場合もある) 庭園と比較すると、意匠的には素朴なしつらえになっている点が、 けた護岸は、人頭大の護岸石を単純に列状に並べるか、野面で積み上げたものが多く、日本近代の 良県奈良市)、旧山田氏庭園 現地調査は、粉川氏庭園(奈良県奈良市)、四天王寺本坊庭園(大阪府大阪市)、 現地調査では、一、宗詮の地割構成上の特徴として、 (奈良県奈良市)、吉年邸庭園 (大阪府河内長野市) 七代·小川治兵衛、本井政五郎、 開放的な芝生園地を主要構成とする 現地調査を実施したすべての の五例に 旧野口氏庭園 小平義近といっ ついて実

流れ蹲踞とした特色を見ることができた。 煎茶趣味の庭の観点から、 ところで吉年邸の現地調査では、茶室に面して流れを配し、 作庭をおこなっていた可能性が考えられる。この様相は、 これは、三代・宗詮が、 かつ流れのなかに手水鉢を配置した 地割構成の意匠化に際しては、 四天王寺本坊

庭園においても流れに井筒を配置する点や、 山・星嶋氏庭園で、流れ蹲踞を採用している点からもうかがうことができた。 残存図面でも、六麓荘に所在した庭園 (造営主不明)

三 三代宗詮に関わる茶道具と茶会

(一)「秋泉亭」献上茶道具について

見を得ることができた。特に茶道具への関心から三代・宗詮を見た時に重要となるのが、「秋泉亭」以上の建築史と庭園史に加え、周辺資料などの調査を通じて、三代・宗詮に関するまとまった知 への献上茶道具である。

またこれ以降も、随時道具が献上されている(注8)。 道具の中で、 具や消耗品などを坂田作治郎・今井貞次郎の道具商二名が納めている。ただし坂田らが納めている よれば、三千家と藪内流の家元、それに三代・宗詮の五人が主だった道具を揃え、 昭和五年六月に『秋泉御茶室御用具』という冊子を出して、これらの道具を記録している。同書に 派の家元らに「秋泉亭」用の茶道具の献上が命ぜられた。宮内省に三代・宗詮を推薦した川上邦基は、 ことになったのは周知の通りである。この 貞明皇后の隠居に際し、大宮御所の中庭に茶室の造営が計画され、三代・宗詮が設計を担当する 鐶や煙草盆・火入・煙管などは、 「秋泉亭」が昭和四年(一九二九)に竣工すると、 実は表千家の惺斎が献上のために好んだ物であった。 その他の水屋道

盛んに写しが制作されており、よく知られた道具となっている。作家としては、楽吉左衛門ら「千邸の梅樹を用いた天目台なども特徴的である。また裏千家から献上された「秋泉棚」は、現在でも 漆仙が参加している。 家十職」に代表される各流派の職家と共に、三代・宗詮が集めた「大阪の十職」の芦田真七や河合 の名前にちなんだ紅葉や水の意匠が要所に用いられると共に、九条家(貞明皇后の生家) 道具の特徴としては、貞明皇后が好んだ菫の意匠を多用している点が挙げられる。また 現在でも 「秋泉亭」 の砂川別

いては、 昭和九年に柏斎が死去すると、三代・宗詮は追悼文で次のように述べている。 柏斎であった。正木と交友関係を持っていた柏斎は、三代・宗詮とも密接な関係にある人物である。 の教授が担当したようである。そして炉釜の制作者として推薦されたのが、大阪の釜師である大國 他に貞明皇后の次男である秩父宮雍仁が、炉用の釜と風炉先屏風を献上している。この二点につ 東京美術学校校長である正木直彦が秩父宮より諮問を受けており、 風炉先屏風は美術学校

とて翁か我に其故よしを語られて、友互にひとしく恩命をよろこひあいひたるも、 しそ悲しみのかきりなり」(注9)

くる。 襲で焼失してしまっているが、現在でも各家元などに控えが残されている。 り、これらの道具が用いられた点でも意義深い。残念ながらこれらの茶道具は「秋泉亭」と共に なものと言える。特に昭和十六年に満州皇帝溥儀が来日した際、この秋泉亭で茶席が設けられてお この一文から、「秋泉亭」への献上が、当時の職家達にとって非常な名誉であった様子が 「秋泉亭」献上の茶道具は、皇居への献上品という意味で、近代の茶道具の中でも記念碑的 伝わって

(二) 松花堂会について

寄せの茶会であり、戦前には大師会、光悦会に並ぶ名声を誇っていた。 また三代・宗詮の業績として、「松花堂会」の運営が挙げられる。 同会は数寄者を中心とした大

これに附属する「松花堂」であった。 には石清水八幡宮の麓に昭乗と師の実乗、弟子の乗淳の墓地が整備され、さらに篤志家の寄進を受 が八幡市を訪れ、その荒廃ぶりを嘆いたことが、松花堂会発足の契機となった。大正二年(一九一三) し、撤去される。わずかに難を逃れたのが、現在も松花堂庭園美術館に残されている「泉坊」と、 維新以降の廃仏毀釈の動きによって、石清水八幡宮境内の「四十八坊」と謳われた神宮寺群は荒廃 同会はその名称の通り、石清水八幡宮の社僧である松花堂昭乗を顕彰するために発足した。明治 同地に泰勝寺が創建される。 明治四十四年(一九一〇)、昭乗に私淑していた益田孝(鈍翁)

の泰勝寺の境内に復興されたのが、 先述の茶室 「閑雲軒」 である。 閑雲軒は石清水八幡宮で昭

二年(一七七三)に焼失しているが、木津家には精密な「滝本坊起し絵図」があり、この図面を基乗が住した「瀧本坊」の茶室であり、設計は親友である小堀遠州が担当した。本来の閑雲軒は安永 こそ少ないものの、正に大師会や光悦会に近い規模の茶会であったことがわかる。 これによれば東京、 の濃茶席を鈍翁、青松居の薄茶席を林楽庵が担当している。泰勝寺には同会の名簿が残されており、 に閑雲軒が再建される。竣工したのは大正十一年、 京都、大阪、名古屋の主要な数寄者と道具商の名前が並んでおり、二席と席数 同年五月に第一回松花堂会が開催され、 閑雲軒

松花堂会の裏方までを務めており、「故宗匠は松花堂会の実に原動力であった」「故宗匠は松花堂会 宗泉宗匠と松花堂会」という一文を寄稿している。これによれば、宗詮が閑雲軒再建の資金集めから、 の産みの親だつたとも云へる」とその貢献を讃えている。 『武者小路』(昭和十四年八号)の「三代宗詮追悼号」には、泰勝寺の住職であった堀尾海應が「故

た昭乗愛好の系譜は、江戸時代の松平不昧、酒井宗雅へと遡るものであり、 戦時下の混乱によって自然消滅したものと推測される。 ける鎹の役割を果たしたと言えるだろう。その後の松花堂会については詳しいことは判っていない の東西の松花堂愛好の系譜が結び付いた成果であったと見れば、 西は平瀬露香へと広まり、近代茶道の一つの潮流を築いていたからである。松花堂会の発足を、こ 2、昭和十三年までの開催は確認されるものの、三代・宗詮や益田孝といった中心人物の死去が続き、 この松花堂会に代表される、松花堂昭乗への関心は、近代茶道史において無視しえない。こうし 三代・宗詮こそが、両者を結び付 ここから東は益田鈍翁、

四一今後の課題

程で、 れる。 平瀬家の茶会記からその存在が明らかになりつつある、ネットワークや順会の構成などを明らかに 取り組むことを共通認識としている。この個別検討の中で、初代・宗詮から三代・宗詮の活動状況、 斎)の自筆と思われる和歌集などの検討も課題の一つに考えていきたい。そして、内容を深める過 活用していきたい。また、初代と二代・宗詮の出仕形態の更なる解明を行なうと共に、初代・宗詮(松 末から近代初めの大阪(大坂)の茶の湯を検討する上で有益な視覚を有していることを、最大限に 標としている。取り組む上では、 と、その大きな特徴、特に今後広く研究に資されるべき史料を提示できるようにすることが挙げら していきたい。 の視点による本格的な研究成果の公表も論集形式も考慮に入れつつ、同じく数年を目処に継続して 最後に今後の課題を述べたい。文書群は目録内容を確定させることで、木津家文書の茶書の概要 その上で、 口頭での成果の公表ができる機会があれば、積極的に活用していきたい。加えて、今後は個々 茶会記全体の翻刻紹介など実りある共同成果を、数年を目処に編集することを目 本文書群に平瀬家文書が含まれて、平瀬露香・露秀親子という幕

謝辞

て謝意を表します。こ岸和田五風荘、更に中條文化財団、 二年にわたる本研究にあたって、当代・木津宗詮・宗隆宗匠、大阪歴史博物館、 いる各個人の方々、少林寺、泰勝寺、 千島土地株式会社の方々に多大なご協力を頂きました。 東光寺、四天王寺、願泉寺の各ご住職様、田尻歴史館、 物件を所有されて がん

無注および 引用文献

中で初年度の報告書に依ることを明示することとし、補注は省略することとする。 十九・二十世紀の茶の湯世界―」、財団法人三徳庵、二〇一一年。以下、 粟野隆研究代表「茶道文化学術助成初年度研究報告書 木津宗詮家の総合的研究― 煩雑さを避けるため、

注 2 教示を賜った。 『願泉寺史伝 木の津の遺跡』願泉寺、七頁~八頁、 一二頁。併せて、 木津宗隆宗匠にも御

注 3 松平家編輯部編纂『松平不昧伝』中、箒文社、 一九一七年、 一七三頁

『和歌山県史』近世資料一、 和歌山県史編さん委員会、 一九七七年、 五一二頁、六七九頁

郷友録 5 の『浪華当時人名録』に確認できる。 『近世人名録集成』第一巻、 天保八年版』、弘化二年 (一八四五) の『新撰浪華名流記 勉誠社、 の『新撰浪華名流記 弘化二年版』、嘉永元年(一八四八)一九八二年。 記述は天保八年(一八三七)の『続浪華

注 6 二〇〇六年) いて―三代木津宗詮・小林一三・笛吹嘉一郎の作風を通して-画系論文集』第六〇二号、 빼文集』第六○二号、日本建築学会、二○○六年)及び同「近代における茶室創作の動向につ松本康隆「3代木津宗詮の職能と茶室の全体的把握のための基礎的研究」(『日本建築学会計 -」(京都工芸繊維大学、 博士論文、

注7 注6に同じ

注8 川上邦基「秋泉御茶室の思ひ出」『茶道月報』 昭和二十六年八月号

在9 『名人釜師 大國柏斎』昭和十一年、四頁

表1 『茶燕録』茶会一覧 ※[]内は翻刻・表作成者による補足情報

-	47	46	45	43	#2	41	40	39	38		37	36 孝士	ಬ ಬ ಬ	32	31	30	2 62	26	251	23 62	N 100	20	10	2		171	165	14	E.3	13	11 5	9	SS ~1	0	44 10	60 10	商曲
		明治4年							1977	树及5年	天保15年	上天供12年1						天保11年					1000	州布·东	大条6年 1835	11人の日が二											和壓 文吸13年
		1871				İ			1870	1866	18	1841						1840	П	1835			TOOU	2027	1835	1007											1830
[1 H]28 H	[1月]27日	1月12日	12月7日	12月4日	12月2日	11月29日	11月27日	11月26日	5月26日		9H12H	12月	11月20日	125	11月	11月		10月7日	Cm	11月7日	10月24日	10月22日	H 16 H 01	0		日81日111	11月8日	10月26日	10月25日		9月28日	9月23日	4月2日	3月23日	2月23	2月22日	1月20日
盆 即 开	細屋氏	[平瀬露香]	平瀬藤杏	[斗艦轉換]	[本類離出]	[平瀬露香]	[平瀬露香]	[香郷謝本]	THE COST	也有·米斯米牌、外马 片灣米道(十屆)并未	京師 矢倉氏		用省[薩兵衛]		八文じ屋庄左衛門	大寺氏	古野五運	二并张大 中十方藻原甲	室谷治郎助	田村大兵街	松屋伊兵衛	當野五左衛門	で展覧大芸品部	(中部) 中部(市)	中海水(土産)岩土	一株林井成館	加々屋作右衛門	伊藤勝兵衛[道勝	飯塚助右衛門	青木大余匠 追福 之御茶	河合族	河合太夫	本準富竹屋徳治	那大右衛門	加島屋市兵衛	藤井川右衛門 小枝五郎 东衛	加島屋久右衛門
		下深庵						ト深尾[一方庵修理不整		* * * * * * * * * * * * * * * * * * * *					京糸屋町										E011			Spanned Spanne		網鴻御別莊		姫路	加賀	木建亭			席
1良七兵衛、伊藤勝兵衛、大鳥	廣岡鬼榮、上村治左衛門、石崎精處、得堂、霧堂、湖流、其他各義家之類	一指斎、中川净益、戸田露斎、春海露申、露堂、湖 流、其他各養家之類	田民七兵衛、橋本院三郎、落藤作右衛門 	1萬四、每日本深刻、赤玄溪共三郎、源四郎	精麗、小池宮友、戸田鬼□、同露吟、	山下次郎右衛門、田尻権兵衛、		門、露室] 長田俊寒、汲堂、山西宗五郎、辻田市六	山中炉摔、戸田権兵衛、露吟、廣岡鬼笑、斎藤作右衛		(祖代、王、治一名、王	茔	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	谷、古林、九十郎			- A. H.	吸江斎、西村姜玉郎 風炉師、住山楊甫	7、但、加	1 1 1 1	描、か	水潭、左思、挡、平4郎	室	馬兵衛、郡、我等、仁助			水津、我等、正兵衛 水津、我等、正兵衛	辻、九月	九郎、増治郎、吉弥		等十、范皮、茅木、采田、丘梨(伊藤勝兵衛[道勝]		助左衛門、小子、天忠、山下、仁助	が然、天八郎、田市	九十郎、大寺、弥左衛門衛授・軍兵員、山楼	伯舟和尚、大寺、宝子、拙	
『茶熊像』c	『茶燕像』c	『茶燕録』c	採購製」c	『茶蕉像』c	『茶燕録』c	『茶燕録』。	7	A A A A A A A A A A A A A A A A A A A	対対		一	一	採熊県 15		『茶瓶飯』b	依据疑告	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	「 株 株 株 成 元	作制版Ja 採馬廠Ja	· · · · · · · · · ·	所 対 対 対 が に の に る に 。	「株態泉」	一条無機の	The state of the s		茶燕綠Ja	一 水 素 素 点 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	『茶燕録』a	『茶燕録』a	『茶燕録』a	※無数』a ※無数』a	· 茶無缺Ja	「茶燕戲」a	株態製品	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		疾患2.5米全局名

Fal			Тоноп	[177365 siz-≤1	T -+-#	由自 无族 L初 拓展海阜、 江田士士	『茶燕録』c
50			3月9日	[平瀬露香]	一方卷	由良、石崎、上邨、坂野源兵ヱ、辻田市六 尾州アラ井人 永井士前、汲雪、磯屋宗庸、霞吟、露	
51			3月22日	[平瀬露香]	一方菴	堂	『茶燕録』c
52			5月9日	青木宗鳳		露香、上村氏、橋本露道、山西宗五郎、原岡介	『茶燕録』d
53			5月15日	大沢宗二	今宮宗丁旧席	露英、露吟、夕場、露堂	『茶燕録』d
54		-	5月15日	南都村井氏		露香、碳矢宗庸、木村我遊、山西宗□郎、原岡介 加州石川縣士族 九里歩殿、石崎精處、本保松二郎	『茶燕録』d
55			5月16日	[平瀬露香]	一方菴	殿、石田小兵衛、露吟	『茶燕録』c
56			5月25日	磯矢宗庸		露香、南都 邨井氏、夕陽、露堂、錫や勝次郎	『茶燕録』d
57			7月16日	[平瀬露香]	一方菴	宗二、二畳、汲雪、宗庸、露吸、露吟、露莲、露堂、露風、	『茶燕録』c
581			7月20日	主碳矢宗庸		汲清菴、夕陽 露香、露通、寄吟、露堂	『茶燕録』d
59			8月1日	[平瀬露香]	弌方菴	石崎精處、宗庸、上邨氏、露吟、露堂	『茶燕録』c
60			8月11日	[平瀬露香]		官休口	『茶燕録』c
61			8月12日	[平瀬露香]		上邮、草間、石田小十郎、汲雪、露吟、露堂、夕陽	『茶燕録』c
62	和歷	ि गार छहर	8月25日	[平瀬露香]		碳矢宗庸、加州人 綿や久平、戸田露竹、戸田露吟	『茶燕録』c 依拠した茶金配名
63	作品		9月16日	[平瀬露香]	/ Interest / Interest	□ 名 草間平二郎、石精處、不参 上邨有邨、夕陽子、跡よ り 岡介 慶寒、湖流	『茶燕録』c
64			9月18日	[平瀬露香]	惺翁奠茶	木田凡堂、橋本藤莚、山口柏宇、井上翁兄、跡より 富子、露堂、露風、柏寿	『茶燕録』c
65			10月26日	[平瀬露香]	一方卷	碌々斎、一指斎、由良七兵衞、跡 湖流、露堂、汲清	『茶燕録』c
66		-	11月11日	一指斎	此奥庵	露香、宗詮、露通、露吟、露堂	『茶燕録』d
68	明治6年	1873	4月23日 1月6日	[平瀬露香]	一方菴	加州大聖寺や、副田又六、同国校、山客九左衛門、吉 谷や信太郎、露吟	『茶燕録』c
69			6月21日	[平瀬露香]	」一方菴	古筆了仲、同內室、夕帰	『茶燕録』c 『茶燕録』c
70			11月9日	[平瀬露香]	弌方菴	最々斎、内本積有、湖流	『茶燕録』c
71	明治7年	1874	1月6日	[平瀬露香]			『茶燕録』c
72			5月10日	[平瀬廊香]		尾州十一ヤ、小出外遊、川勝太兵衛、露吟、跡より 岡 介、小半七郎、戸田□清介	『茶燕録』c
73			6月9日	[平瀬露香]	一方庵	玄々斎、嶋田与三右衛門、綿津宗味、国松栄吉、靍吟	『茶燕録』c
74 75			9月25日	[平瀬露香] [平瀬露香]	一方菴	一	『茶燕録』c
76	明治8年	1875	1月6日	[平瀬露香]	一方壶	汲室、富子、卜深、此奥、二奥、渡部、岡本、行松、	『茶燕録』c
77			4月27日	[平瀬露香]	一方菴		『茶燕録』c
78			5月24日	[平瀬露香]	一方菴		『茶燕録』c
79	明治9年	1876	1月17日	[平瀬露香]		卜深、此與、二與、赤松、甲谷、富子、小、赤松、渡 部、橋本、岡本、辻田、山西、原、湖流、為蔵、春 海、水松、平池、黒崎、梅原、高石、北川、大原	『茶燕録』c
80	卯冬		10月2日	木津宗詮			『茶燕録』x
81	卯冬		10月3日	三番萬斎			『茶燕録』x
82	卯冬		10月7日	加々屋記兵衛			『茶燕録』x
83	卯冬 卯冬		10月9日		組甲丁		『茶燕録』x
85	卯冬		10月10日	平井治郎右衛門			『茶燕録』x 『茶燕録』x
86	卯冬		11月8日	井上権兵衛			「茶燕録』x
87			1月29日	伊藤勘左衛門			『茶燕録』x
88			2月6日	八木忠兵衛			『茶燕録』x
90			2月 3月28日	梅田氏 荒堀源之助	-		『茶燕録』x
91			6月6日	元 堀 源 之 切 山 形 新 右 衛 門	 		『茶燕録』x 『茶燕録』x
92			3月19日	布屋平兵衛			『茶燕録』x
93			4月3日	木津宗詮			「茶燕録』x
94			10月3日	早川			『茶燕録』x
95			10月8日	木津宗詮			「茶燕録』x
96 97		-	10月23日	杉岡宗得 木村平兵衛			了茶燕録』x
98			10月16日	飯塚永大夫			「茶燕録』x 『茶燕録』x
99			11月8日	井上清三郎			茶無録』x
100			11月16日	木村平兵衛順			「茶燕録』x
101			11月25日	三浦市右衛門			『茶燕録』x
102			11月26日	三枝口兵衛			"茶燕録』x
103			11月27日	長谷川孫兵衛 此方順会			「茶燕録』x
			114/110 [114.77周云			「茶燕録』x
104			12月17日	此方順会			茶燕録』x

23年度調查物件

表 2 平成 2 3 年度建築調査物件

調查日時	物件名	建設·築造年	設計者	所在地	茶室の形式	茶室の特徴
	少林寺「三猿堂」	1935(昭和10)以後	丰斎	岡山県岡山市	二畳台目向切	床脇に像を納める、単純構造、瓦の充実
	旧柳生崙家老屋敷	1841(天保12)	松斎	奈良県奈良市		
	泰勝寺 関雲軒」	1922(大正11)	丰斎	京都府八幡市	四畳台目	復興茶室、建ちが高い
	吉年邸「蒼茫」	不明	丰斎	大阪府河内長野市	二是台目向板向切	浅い板床、外部空間との接続、単純構造
	吉年即「染雲」	不明	丰斎	大阪府河内長野市	四畳半、下座床	斜め接続、軒下空間の充実
	大眉即「青牆亭」	不明	車斎	香川県大川郡	三畳向板向切	凝った床面、軒下空間の充実
	大眉邸「豐泉亭」	不明	丰斎	香川県大川郡	八畳	特徴的な書院欄間
	高木邸「即休庵」	1911(明治44)頃	丰斎	香川県高松市	二畳台目向板向切	一間床、軒下空間の充実、単純構造
	東光寺「松月庵」	1917(大正6)頃	丰斎	香川県三豊郡	四畳半	特徴的な塗り回しの床、大工の遊び
	片山邸「豊泉亭」	1910年代(大正初年)	丰斎	香川県小豆郡	四畳半	浅く凝った床面、単純構造
	鳥飼即「独楽亭」	1926(昭和元)頃		香川県高松市	四畳半	建築を通り抜けるアプローチ、床と硼口が並ぶ
	四天王寺「払塵亭」	1933(昭和8):改修	聿斎	大阪府大阪市	三畳台目	既存建物の活かし方、単純構造、軒下空間の充実
	四天王寺「払應亭」	1933(昭和8):改修	丰斎	大阪府大阪市	四畳半	壁床の充実(図面)
2012/2/12		昭和初期か:改修	丰斎	大阪府大阪市		
	田尻歴史館「芳庵」	大正期	丰斎	大阪府泉南郡	七畳	付庇が少ない、軒下空間の充実
	田尻歴史館「芳庵」	大正期		大阪府泉南郡	六畳	外部空間との接続
	五風荘「利庵」八窓席	1939(昭和14)	丰斎	大阪府岸和田市	三畳中板	引込戸用壁、閉鎖的
2012/2/13	五風荘「利庵」残月席	1939(昭和14)	丰备	大阪府岸和田市	七畳	本歌との違いが大きい